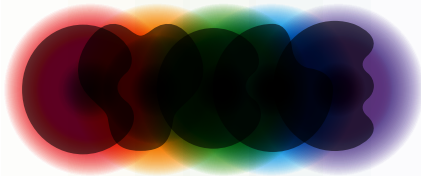


KNOW NO LIMIT 2018

11月4日に開催された、第12回を数える脊髄損傷者による歩行披露イベント「KNOW NO LIMIT」。J-Workout (以下JW) のクライアント、ご家族、友人、JWIに関心のある脊髄損傷者や医療関係者、一般の方など、今や約400名が参加するビッグイベントです。これほど多くの車いすに乗った方が、意気揚々と集まっている光景もそうはないはず。今年のテーマは「CYCLE」。「誰かの回復が、それを見た誰かの回復を生む」という意味から付けられました。医師から「二度と歩けないでしょう」「一生車イスです」と告げられても、再び歩くことをあきらめず、JWIに希望を見出し、トレーニングを続ける約400名のクライアントから選ばれたパフォーマーたちの「回復」のステージをご紹介します。



「WALK FOR □」 「ANOTHER STORY」

まずは「WALK FOR □」のパフォーマンスからスタート。5人の挑戦者それぞれが「～のために歩く」という想いを込めて、歩行器やクラッチを使って歩行を披露。障がいの度合いも、回復の度合いも異なるが、目標に向かって、1歩1歩あゆむ姿に、あたたかな拍手が送られた。次の「ANOTHER STORY」のステージでは、「歩く」という挑戦以外に、様々なことに挑んでいる3人が登場、自身の「今」を語ってくれた。ウェブデザインのフリーランスとして独立された方。就職、一人暮らし、車いすバスケットへの挑戦、結婚…と未来を自分で切り開き続けている方、もうすぐお子さんが生まれ家族が増えることに感謝して、今まで以上に仕事に興味と熱を入れ楽しい日々を暮らしたいと決意を語る方。自分らしく懸命に生き生きと日々を送る3人の方々の言葉に、勇気づけられた人は多いに違いない。



「MAIN WALKING」

最後はメインイベントである、この1年で最も回復したとされる7名の歩行披露。9歳から58歳と年齢や受傷原因、重症度も違う7名だが、共通することは「二度と歩けない」と医師から宣告を受けたこと。そして「何が何でも再び歩く」という強い思いを持ち続けていること。緊張感や期待感に包まれピンと張り詰めた空気の中、来場者投票による大賞「Recovery of the Year」に見事輝いたのは、千葉県佐倉市在住の松本卓巳さん(24)。

松本さんが受傷したのは2017年1月。父親の建設会社で働いていて、作業中に転倒。重機の下敷きになり腰髄を負傷した。「意識があったので、事故のことは一部始終、覚えています。入院中は事故のことを夢で見ては、夜中に目が覚めて涙が出ました」。それでも家族や見舞いに訪れた人の前では、無理して笑っていたと話す。JWのトレーニングは病院のリハビリとは比べものにならないほどハード。「どれだけハードなトレーニングをやっても、歩けないという現実と直面しました。モチベーションが下がってトレーナーに気持ちをぶつけたこともあった」。最終的には歩いて、父親とまた同じ現場で働きたい。自分との闘いは続いている。

松本さんの挑戦は、階段をのぼってステージに上がるころから始まった。ステージに上がると、「親父、見てるかっ!」と力強い一声。まずは2本のクラッチを使いながら、リズムよく足を運び、ステージの端から端まで約7メートルを数十秒かけて歩く。次にクラッチ1本に持ち変えて歩行。バランスをうまく取りながら、着実に歩を進めた。そして、ほんの1か月前から取り組んでいるというフリー歩行に挑戦。交互に踵を蹴り上げ、膝を曲げ、片足を繰り出す。その1歩1歩に会場から大きな拍手が鳴った。さらにステージの真中で、1本のクラッチを片手にもち、もう片方の手で、重さ12kgの自分の車いすをゆっくりと持ち上げると、そのまま数歩、歩いてみせた。12年間のイベントで誰も成しえなかった快挙からたたみかけるように、今度はクラッチをトレーナーに預け、体を支えるものを持たずに両足で立ち、片手で高々と車いすを持ち上げた。度肝をぬくパフォーマンスに会場から歓声と拍手、感嘆のため息が漏れた。

さまざまなパフォーマンスを成功させ、マイクを向けられた松本さんは、少しはにかんで「トレーナーさんが勝手にいろいろ挑戦させるもんだから…」と照れてみせた。「でも参加するなら、優勝したいとひそかに狙っていました」「こういう場でしか言えませんが、お父さん、お母さん、会社の方々、いつもありがとうございます。これからも頑張ります」と締めくくった。



すべての人に「CYCLE」は起きている

観客の中には肩をふるわせ、嗚咽をこらえながらステージを見守る方もいる。それは、クライアント、ご家族、トレーナーなど関係するすべての方々の真摯な思い、覚悟、未来への希望が伝わってくるからだ。『KNOW NO LIMIT は単なる歩行披露のイベントではなく、自分は限界に挑戦しているのだろうか。漫然と1日を過ごしてはならないだろうか、あらためて自分の生き方を問う機会を与えてくれるイベントでもある。そういった意味で、「CYCLE」は会場にいる脊損者も健常者も関係なく、すべての人に起きている。

KNOW NO LIMIT ～限界なんてない～



特別講演：『脊髄損傷者の歩行機能再獲得を目指して 再生医療とリハビリテーション技術の融合』

障害者リハビリテーションの研究・調査を行う厚生労働省管轄の研究機関「国立障害者リハビリテーションセンター研究所」の河島則天先生をお招きして開催した「KNOW NO LIMIT 2018」特別講演『脊髄損傷者の歩行機能再獲得を目指して 再生医療とリハビリテーション技術の融合』。臨床研究として、肝細胞移植と鼻の粘膜移植の2つの再生医療の前後のリハビリを行っている科学者の視点で語られた“リアルな声”を、サマリーとしてご紹介します。

国立障害者リハビリテーションセンター研究所

河島 則天 先生

Kawashima Noritaka

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 運動機能系障害研究部・神経筋機能系障害研究室 室長。ヒトのからだの仕組み、巧みで柔らかな運動調節の仕組みの理解を通じて、身体機能回復（維持／向上）のための新しいリハビリテーション（トレーニング）方法の構築を目指している。

「人の歩行」の研究を行っている機関は世界に数多く存在するが、個人的な感覚では、歩行に関する仕組みはまだ2、3割程度しか解明できていない。仕組みがわかって初めて、歩けなくなった人が再び歩く手段、理論的根拠の道筋がつくが、残念ながら今のところ、「完全損傷の方を再び歩かせる」と自信をもって言うことはできない。これを再生医療やリハビリで「歩けるように近づけていく」研究が続けられている。

歩行の命令は脳だけではなく、脊髄の中にもその仕組みがある。だから、損傷部位より下に脊髄が続いており、この部分が残存していれば、「歩く」という神経システムを再生できると考えられる。重要なのは、残存神経を保持するため、トレーニングを積むことだ。最近、私も以前から注目しているスイスのグループが発表し「Nature」に掲載された秀でた研究では、5か月間の継続したトレーニングを行った結果、脊髄に電気刺激を送っているときも送っていないときも、機能に改善が見られた。今まで解決困難だった、「脊損者をシステムティックなトレーニングで改善に結びつけた」ことを示した。

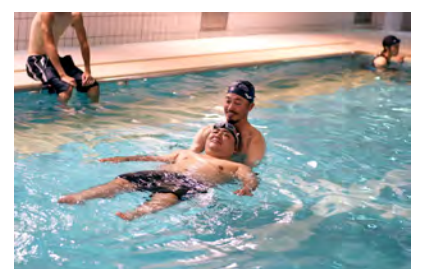
また、ブラジルワールドカップでロボットスーツを着て始蹴式を行った方の姿には驚かされた。この方はASIA-Aという最も重度な完全損傷の診断を受けていたが、米国サンディエゴにあるProject Walkのプラントであるブラジルの施設でありとあらゆる最先端のトレーニングを長期間行い、これだけ改善した。現段階で重症とされてもこのような変遷をたどれるという可能性、その根拠を見定めるのが、我々の役割だ。

「再生医療」に関しては様々な情報が飛び交い、「再生医療を受けると即歩けるようになる」など少し認識に混乱が見受けられる。かなりの過大評価がなされているため、我々は再生医療を行うと実際にどこまでよくなるのか、過大評価のギャップを埋めるようなエビデンスを出そうとしている。ちなみに、ひとたび途絶えた中枢神経を再びつなげる。これが再生医療の領域。次に、中枢神経がつながったとして、機能回復できるか？これは神経リハビリテーションの領域。さらに、神経がつながらず、機能改善も見られない場合、どのように歩行を実現するか。これは「機能代行」という考え方になり、工学的なアプローチが必要となる。それぞれが異なる領域として、きちんと線引きされる必要がある。

再生医療後のリハビリをしっかり行う重要性は認識されてきているが、同じく再生医療前にもリハビリが必要ということはまだまだ認識されていない。前後のリハビリを全て医療が担うのか。ずっと医療に依存するのか？については疑問だが、我々は、損傷した脊髄の下の方の脊髄機能を維持するためのツールを作っておかなければならないと考え、現在歩行装具を開発している。足の機能が完全麻痺の方の装具で、素材はカーボン、モーター搭載なしの軽量化を追求。また、歩行時に膝を曲げられることにトライしている。開発が実現したら、退院後もリハビリを続けたい、もっと良くなりたい、自分の可能性を試したいといった方や、JWのスタジオでこの装具を付けて歩いている方々が見られるのではと期待している。

これまで完全損傷、不完全損傷の方に行うリハビリには乖離があった。再生医療はこの現状に風穴をあけ、境目のない機能回復を実現することが期待されている。我々は、再生医療の前後でどのようなリハビリを行うと残存機能を維持し、脊髄機能を最適化し、改善に結びつけるかといった研究をこれからも行っていく。JWのような施設と我々のような研究機関がこれまでの経験や成果、情報を提供しあい、お互いに知識の底上げをして、お互いのもつ情報を患者さんにフィードバックしていくことが理想。JWのクライアントさんから再生医療を受ける方が現れ、JWがその方のリハビリを担当するといった、双方で成果を達成できる未来が近く必ずくと確信している。

担当ライター：有田円香



<お問い合わせ先>

ジェイ・ワークアウト株式会社 PR担当 山本剛史 TEL:03-5809-9390 / 080-1899-8523 MAIL:yamamoto@j-workout.com